

# C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese di Kyoto

現地語学学校紹介： フィレンツェ 他

## \* LINGUAVIVA グループ \*

丹羽 由美子（同校スーパーバイザー）

今回 LINGUAVIVA グループをご紹介するにあたり、学校全般についての説明はもちろんですが、私自身この学校でイタリア語を学んだ経験を踏まえ、個人的な経験談や感想も併せて二部構成でお届けします。



【LINGUAVIVA 校 受付の様子】

### ● 第 1 部

LINGUAVIVA グループは 1976 年創立の語学学校で、数あるイタリア語学校の中でも長い歴史を持つ学校の一つです。イタリア国内にはフィレンツェ校の他、ミラノに 1990 年創立の LINGUADUE があり、またリニャーノではジュニア対象のサマースクールを開講しています。なお、東京にも姉妹校リンガビーバ・イタリア語教室があります。

### <コース・プログラム>

イタリア語コースを始め、様々なコースやプログラムがあり、目的に合わせて選んでいただけます。一番多くの方が受講されるのは一年を通じ毎

月開講されているスタンダード・コース。月曜～金曜日まで毎日 4 レッスン(1 レッスン: 45 分)の授業で、文法と会話の授業各 2 レッスンに分かれています。レベルは学校の規模が大きい利点を生かし、入門から上級レベルまで毎月開講されていますし、特に入門・初級は同レベル内にも複数のクラスができることも多いので、みなさんのイタリア語理解度に合ったレベルやクラスが見つかるはずです。1 つのレベルを 4 週間で勉強し、最終週のテストの結果によって進級が決まります。

レベル 1 から始めたい方以外は、まず初日にクラス分けテストを受けていただきます。文法、作文、リスニング、会話(1対1の面接形式)の理解度をチェックしレベルを決めます。レベルが合わない場合はコース編成担当講師と相談の上、変更することも可能です。

スタンダード・コース以外にもイタリア語の授業と組み合わせたイタリア料理コースやアート・コース、大学・専門学校入試準備コースなどをたくさん のコースがあります。中でも今年から始まったシニア対象のカルチャー・プログラムは大変魅力的です。イタリア語の授業はスタンダード・コースより短い時間とはいえ、生活に必要な会話を中心に学び、午後や週末はほぼ毎日、日替わりの課外活動が企画されています。例えば 2009 年 9 月のプログラムですと、工房見学(サンタ・マリア・ノヴェツァ薬局、皮革小物、ジェラート)、遠足(シエナ、サン・ジミニャーノ、ピサ、チンクエ・テッレ)、美術館見学(ウッフィーツイ、アッカデミア)、ワイナリー

見学、イタリア料理講習など、イタリア文化に興味のある方にはぴったりのプログラムです。なお、“シニア対象”と謳ってはいますが特に年齢制限はなく、今回の参加者の中には 40 代の方もいらっしゃいました。ちなみに全ての課外活動の料金は授業料に含まれています。

その他、「イタリアで働いてみたい」という方にはインターンシップ・プログラムがあります。イタリア語研修後にご自分の専門分野のイタリア企業や工房などで研修するものです。

このプログラムは二部構成になっており、始めにイタリア語コースを受講していただきイタリア人の中に入っても困らない程度のイタリア語コミュニケーション能力(中級レベル程度)を身につけた後、インターンシップ専門の斡旋会社の担当者との面接、企業との面接などを経て研修先を探していきます。「イタリアで働きたい」と思ってもそう簡単ではありません。具体的に何を準備し、どんな手続きを取ったら働けるのか分からない、という方にはインターンシップ・プログラムがお勧めです。このプログラム終了後にイタリアに残って仕事をしている方もいますし、日本に帰国後あらたに事業を始められた方もいらっしゃいます。イタリアに関係した仕事に携わりたいという方にはぴったりのプログラムです。

#### <講師>

イタリア語の授業を担当するのは、外国人に教える経験の豊富な優秀な講師たちです。その中には日本でイタリア語を教えていた講師、ヴェネツィア大学「カ・フォスカリ」日本語学科出身の講師なども在籍しているので、特に入門の方には何かと助けになるかと思えます。

授業の質は高く、レベルごとのカリキュラムに従って進行します。授業と一定量の宿題をこなしていくうちに、実力がついていくのを実感されることでしょう。

#### <日本人スタッフ>

私たち日本人が留学してイタリア語を学ぶ場合、いろいろな困難や壁にぶつかります。そんな時に心強いのが日本人スタッフの存在です。現在のフィレンツェ校スタッフは高田佳子といい、コース初日と2日目の他、基本的には週3日みなさんからの

さまざまな相談にのっています。彼女自身イタリアで学び結婚、現在は2児の母親ということもあり、学校、生活一般、進学など親身になって話を伺います。コース初日には学校受付におりますので、初めてイタリア留学される方には安心していただけることと思います。



【LINGUAVIVA 校 外観】

#### <課外活動>

学校が企画する課外活動には定評があり、日替わりのプログラムが毎月変わっていきます。課外活動には必ず講師あるいはスタッフが同行し、歴史の説明などをします。遠足は学校がチャーターしたバスで行くことが多く、学校の仲間と長時間過ごすことになり、イタリア語の勉強にも役立つので大変お勧めです。

#### <宿泊先>

宿泊先は希望によりホームステイ(朝食付、朝夕食付、キッチン使用可)、シェア・アパート、個人用アパート等の中からお選びいただいています。イタリア家庭での暮らしを垣間見てみたい方、そしてイタリア料理に興味のある方はホームステイの朝夕食付を、また、より自由な生活をしたい方は他の学生と共同生活するシェア・アパートをお勧めします。どちらもそれぞれ魅力がありますの

で、ご自分のライフスタイルに合ったものを選んでください。

どのタイプの宿泊先でも到着日に家主から鍵束を渡されますので、滞在中は自由に入出りしていただけます。

## ●第2部

### <経験談>

私が LINGUAVIVA フィレンツェ校で学んだ'90年代半ばは、まだ今ほど日本人学生の数も多くな、実際学校の規模も今より大分小さかったせいもあり、スタッフとも親しくさせてもらいました。当時は主にヨーロッパ各国から来る学生が多く、母語が日本語の私は文法の授業は何とかついていけるものの、会話の授業になると途端に無口に…。イタリア語を学んだことのある日本の方なら同じような経験をされた方も少なくないかと思います。例えば習ったばかりの時制で動詞を活用し、授業後すぐに事も無げに使いたすヨーロッパの子がいる一方、私が実際に会話の中で「使えた！」と実感するのは数ヶ月後だったりしたものです。それでも諦めず、午後もクラスメートと一緒に学校に残って宿題や復習などをしながら毎日過ごすうちに、次第にイタリア語が身につき、徐々に話せるようになっていきました。

留学当初、私が心がけていたことはただ一つ、課外活動などできるだけ多くの場所に顔を出し、イタリア語に触れる機会を多く持とうとしたことです。学校に通っていた数ヶ月間、ほとんどの遠足に参加しました。学内の別のクラスの学生とも丸一日一緒に過ごせば気心も知れ、その後も食事や飲みに出かけたりして、段々と友人も増えていきました。友人が多くなれば一緒に出かける機会も増え、イタリア語を話さなければならない機会をたくさん持てたことが結果的には良かったのだと思っています。

本心を言えば、毎回遠足に参加し、友人たちと

外食するにはお金もかかりますし、大変ではありましたが、これもイタリア語を話すための“授業料”と割り切っては出かけて行ったことを、つい昨日のように思い出します。

その当時知り合った友人とは今でもずっと連絡を取り合い、各地で会っています。多くの友人と学校内で知り合えたことは私の財産です。

その後、フィレンツェ校で日本人スタッフとして働くようになりました。ある時期から日本人学生数が急増し、入門や初級で同じレベルを繰り返す方がいたこともあり、校長からの指示で補習授業を行うようになりました。一緒に宿題をしたり、当日の授業で理解できなかった文法内容を説明したり、補習と銘打ちながらもイタリア語の勉強だけにとどまらず、『よろず相談所』のような役割も担っていました。先に書いたように、外国で暮らすうちにはいろいろな事が起きます。まずは健康面。体調が悪ければ勉強どころではありませんし、気持ちも萎えます。その他、ありとあらゆるタイプの相談が持ち込まれました。その中で、教えること、そして人と接することを学ぶ経験ができ、本当に幸運だったと思っています。

イタリアにだれひとり知人もなく、学校が紹介してくれたホームステイ先のアドレスだけを頼りにイタリアに来た私にとって、一番安心できる場所はやはり学校でした。振り返ってみても本当に多くの時間を学校で、その関係者と一緒に過ごしてきました。

楽しい事ばかりではない外国暮らし。でもそんな時にどこか自分の居場所を見つけられたら、大変な事があっても前に進めると思います。現在イタリア留学を考えていらっしゃる方々にも、そんな安心できる居場所、学校が見つかることを祈っています。それがこの LINGUAVIVA であったなら、私にとってそれはこの上ない幸いです。

(LINGUAVIVA スーパーバイザー)

イタリア発月刊日本語新聞

**COMeVA**  
Pubblicazione mensile distribuita in Italia e in Giappone

イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC  
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy  
Tel. & Fax : (06) 4743. 212  
E-mail : comeva@nipponclub.it  
URL : www.nipponclub.it

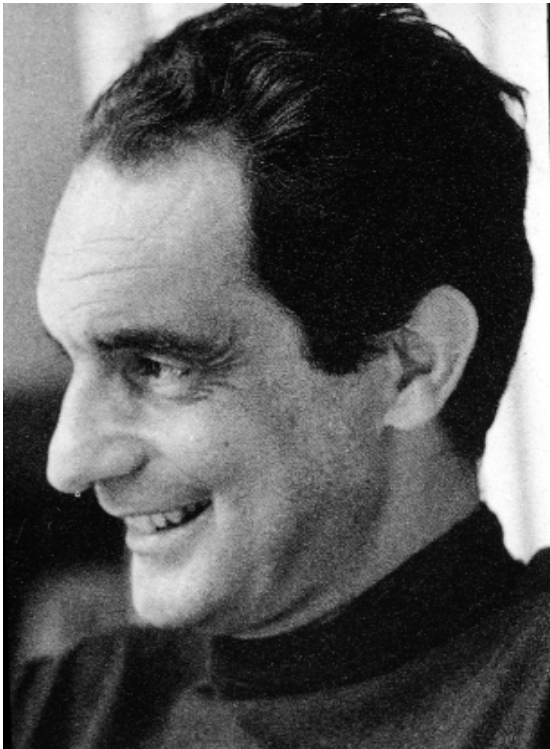
お問い合わせ等は NIPPON CLUB SNC 宛てにお送り下さい。

## 『カルヴィーノとアーティチョーク』

### 第1回

堤 康徳

イタリア語の原書を四苦八苦しながら読み始めた30年ほど前のこと、辞書を何度引いても、どうしてもおぼえられない言葉があった。アーティチョークを意味する、carciofo がそれである。この言葉に初めて出会ったのは、イタロ・カルヴィーノの短篇のなかでだった。



【イタロ・カルヴィーノ】

1980年の夏、卒論のテーマをカルヴィーノの初期の作品に決めた私は、1949年の処女短篇集『カラスが最後に来る』をイタリア語で読む必要に迫られた。当時すでに、カルヴィーノの代表作が続々と日本語に訳されていたにもかかわらず、この短篇集には訳本がなかったからである(カルヴィーノの文学を知るうえでこれほど重要な短篇集が、なぜか現在にいたるまで全訳されていない)。もしあれば、怠惰な私はきっとそれに頼ってしまっ

ていたにちがいない。この本には、1945年から1949年のあいだに書かれた30の短篇が収められている。私が読んだのは、初版に忠実な1976年版で、エйнаウディの〈ヌオーヴィ・コラツリ〉叢書の一巻である。

『カラスが最後に来る』において、寓話的に描かれたパルチザン闘争と、解放まもないイタリアの状況は、そのほとんどが、カルヴィーノが少年期を過ごしたリヴィエーラ地方の豊かな海と森、そしてそこに生息する動植物と密接に結びついている。それは、カルヴィーノの家庭環境とも無縁ではない。イタロ・カルヴィーノは、1923年、キューバの首都ハバナに近い、サンチャゴ・デ・ラス・ベガスで生まれている。農学者の父、マリオ・カルヴィーノと、植物学者の母、エヴェリーナ(エヴァ)・マメーリは、当地の農学試験場の研究者だった。マリオが故郷サン・レモの花弁試験場の所長に任命され、一家がイタリアに帰国するのは、1925年のことである。サン・レモ市街を見下ろすカルヴィーノ家の広大な庭はパパイアやグアバナなど熱帯原産の植物で埋め尽くされていたという。

巻頭の短篇「ある午後、アダモは」を読んでみよう。登場人物は、対極的な生活環境に属する、15歳の庭師リベロと、14歳の家政婦マリア・ヌンツィアータのふたり。少年の名はエスペラント語で自由を意味し、少女の名は誕生日が受胎告知の日であることにちなむ。リベロが語る彼の父は、息子と同じく長髪で、肉食主義者であり、エスペラント語を話し、無政府主義者の地理学者エリゼ・ルクリュの本を息子たちに読み聞かせている。一方、カラブリア地方出身の少女は、兄弟が多くて貧しいベルガモット農家に生まれ、カトリックの信仰とともに育っていることが読み取れる。自然児のリベロは、ヒキガエル、ハナムグリ、蛇、トカゲ、金魚など、庭に生息するさまざまな小動物を少女にプレゼントして彼女の気を引こうとする。それらの生き物を気味悪がる少女も、少年本人には関心をいさぐようすがうかがえる。結局、少年は台所にしのびこみ、生き物たちを食器や鍋に入れて少女への置き土産にする。これが物語のあらすじである。

新進の作家がイタリア解放直後に発表したこの作品に、牧歌的な明るさと希望を見出すことは困難ではあるまい。ここに描かれているのは、題名

が示唆するように、原罪以前の楽園の風景であるかもしれない。あるいは、「言語の混乱」以前に存在していた人類の祖語、アダムの言語の話される理想郷(宮沢賢治が用いたエスプレントの造語イーハトーブが思い出される)が、国境も国民語の垣根も取り払われた来たるべき世界として描かれたのかもしれない。

ところで、問題の *carciofo* は、リベレスとマリア・ヌツィアータの次のようなやりとりのなかにある。

「わたし、もう台所に戻らないと、リベレス。めんどりの羽をおしらなきゃ」  
「ゲッ！」  
「どうして、ゲッなの？」  
「ぼくたちは死んだ動物の肉は食べない」  
「じゃあいつも、四旬節みたいな暮らしなの？」  
「なにそれ？」  
「ふたん何を食べてるの？」  
「たくさんあるよ、アーティチョーク(*carciofi*)にレタスにトマト。父さんは、動物の死んだ肉を食べたがらない。コーヒーも砂糖もね」

菜食主義者のリベレスが、食物としてまっさきに名を挙げた *carciofo* は、アラビア語の *kharshūf* に由来する。英語名が *artichoke*、日本名は朝鮮あざみ。平凡社の百科事典によれば、地中海原産のキク科の多年草で、直径 15cm ほどの紫色の頭状花を咲かせる。15 世紀にはすでにイタリアで栽培されており、総苞片内〔総苞(ほう)とは、花序全体を基部で包む小さいうろこ状の苞の集まりのこと〕の肉質部を食用にする。

イタリアでは、揚げたり、詰め物にしたり、さまざまな方法で調理されている。現在は日本でも売られているアーティチョークだが、私がカルヴィーノを読み始めた 1980 年前後にはまだほとんど知られていなかった。少なくとも私にとって、まったく未知の野菜だった。白水社の伊和辞典(小学館の伊和中辞典はまだ出版されていなかった)には、「朝鮮あざみ」という訳語しか載っておらず、それを見るたびに狐につままれたような気分になったものである。*carciofi* は、「ある午後、アダモは」だけでなく、『カラスが最後に来る』の三つ目の短篇「枯れ枝のうへの夜明け」と、五番目の「荒地の

なかの男」にも出てくる。30 年前に使ったテキストをめくると、わずか 40 頁のあいだに 3 度も同じ言葉が出てくるのに、私はその下に鉛筆で、いずれも「ちょうせんあざみ」と平仮名で訳語を書き写しているのである。

しかし、もうその言葉を二度と忘れることはないだろう。1982 年 9 月から 1 年間、ナポリ東洋大学に留学する機会を得た私は、実物を見て、手で触れ、食べることができたからである。それを始めて食べたのは、ピザの具としてだった。イタリアのほとんどの *pizzeria* のメニューには、*pizza quattro stagioni* (四季の味のピザ)というピザの種類があり、必ずアーティチョークがトッピングされている。あとの三つはたいてい、ハム、キノコ(シャンピニオン)、オリーブである。とはいえ、竹の子のような、ごぼうのような食感で、独特の苦味があるこの野菜が、どうも私はいまだにあまり好きになれない。昔、何度も辞書を引かされた苦い記憶が残っているせいだろうか。



【アーティチョーク *carciofi*】

当時、ナポリの下町の市場に行くと、見たことのない野菜がまだまだたくさんあった。赤と黄色の大きなピーマン、それにズッキーニ。私にはズッキーニにまつわる苦い体験もある。キュウリだと思いこんで買ったズッキーニを生でポリポリとかじり、舌がチクチクしてきて初めてそれがキュウリではないことに気づいたのだ。

ナポリに着いたばかりのとき、まだ住む家も決まっておらず、最初の数日間を、郊外のメルジェッリーナにあるユースホテルで過ごした。そこには、その 2 年前、つまり 1980 年の大地震で家を失った地元の人々も何世帯か住んでいた。メルジェッリーナは、ナポリ沿岸の景勝地のひとつだが、

私には風景を楽しむ余裕はなかった。ユースホステルに近い公園に、ウェルギリウスの墓と、ナポリで死んだレオパルディの墓があったのをおぼえている。

最初の日曜日、日本の友人に紹介してもらった中国語と朝鮮語を学ぶナポリ東洋大の学生パトリツィオが、昼食に招待してくれた。スペイン地区と呼ばれるナポリの下町にあった彼の実家で、私はお母さん手料理を味わった。大盛りのスパゲッティ・アル・ラグ(spaghetti al ragù)には、ひき肉ではなく、マグロのぶつ切りのような牛肉の塊が入

っていた。そしてそのうえに、豆腐のような白いサイコロ形の食物が載っていた。私は、それが何かパトリツィオに訊いた。彼は、モツァレッタというチーズだと答えた。ナポリで初めて食べたこのパスタの味を、私はいまだに忘れることができない。

(慶應義塾大学非常勤講師)

## … 会館 だより …

### ボルゲーゼ家の秘宝

名門貴族ボルゲーゼ家のシピオーネ・カファレツリ枢機卿によって建立されたボルゲーゼ美術館。ルネサンスからバロックにかけての美術品の数々は今なお私たちを魅了しつづけています。今回のセミナーでは、神戸大学の宮下規久朗先生をお招きしてボルゲーゼ美術館に所蔵された彫刻・絵画の解説のみならず、ローマ教皇パウルス5世を輩出するなど一時代を牽引したボルゲーゼ家の栄枯盛衰についても詳しくご説明いただきます。

講師：宮下規久朗(神戸大学准教授)

日時：11/28(土) 18:00～20:00

参加費：受講生・一般 1,500円

個人維持会員 500円

会場：日本イタリア京都会館 本校

定員：50名(先着順)



### イタリア語 in ヴァカンス

暮れゆく京都で楽しみながらイタリア語を学んでみませんか？内容は当館初級2レベル(近過去、複数形等)

講師：当館イタリア語講師

日時：12月23日(水)～26日(土)

10:00～16:30(26日は14:00終了)

参加費：30,000円(教材費・税込)

会場：日本イタリア京都会館 本校

### イタリア語 無料体験レッスン

1月より開講の冬期イタリア語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

● 梅田：大阪駅前第4ビル

1/7(木) 19:00～20:30

1/10(日) 13:00～14:30

1/10(日) 15:00～16:30

● 四条烏丸：ウイングス京都

1/12(火) 19:00～20:30

● 京都本校：日本イタリア京都会館

1/6(水) 11:00～12:30

1/9(土) 11:00～12:30

1/9(土) 13:00～14:30

[編集後記]

今月より連載を始めていただいた堤康徳先生は、東京外国語大学修士課程修了(イタリア文学専攻)。ナポリ東洋大学留学。翻訳家として幅広く活躍されています。主な訳書は「流神」(ジョルジョ・アガンベン著)、「ロナウジーニョ The Smiling Champion」(ルーカ・カイオーリ著)、「黒い天使」(アントニオ タブッキ著)、他多数。また「サッカーファンのためのイタリア語」(白水社)、「会話で覚えるイタリア語動詞 333」(東洋書店)といったわかりやすいイタリア語学習書も著されています。今後の連載もお楽しみに！

編集・発行 / (財) 日本イタリア京都会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4

TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357

E-mail: centro@italiakaikan.jp

URL: <http://italiakaikan.jp/>